

宝生院蔵『弥勒上下経遊意十重』について

伊 藤 隆 寿

表題の文献は、名古屋宝生院（大須文庫）に所蔵される、均僧正撰の撰号を有するものであり、吉蔵撰として現在伝えられている『弥勒経遊意』は、実は慧均の作ではないかということに対して根拠を与える新資料である。以下この問題につき若干論述することにした。

一、はじめに、本文献を見出すに到つた理由を説明しておきたい。筆者は数年来、吉蔵の撰述書を改めて整理しようとの方針で着手しているが、大日本続蔵経、大正蔵所収の『弥勒経遊意』に対して、吉蔵の真撰ではないのではないかと、この疑問が提起された。そこで、諸種の点より検討を加え、すでに駒沢大学仏教学部論集第四号（昭和四十八年）に発表した。

重複になるが、その要点を述べれば次のようである。

A、己続蔵、大正蔵及び現在知られている写本（東大寺、高野山大、大谷大、京大）のすべてに、撰名がないこと。

B、目録を見ると、『弥勒経』の「遊意」として、吉蔵のもの一卷（安遠録・東域録等）と、慧均のもの一卷（東域録・謙順

録・三論宗経論章疏目錄）の二種が記載されており、吉蔵の書は『弥勒経遊意』として諸本一定し、慧均のは『弥勒上下両経遊意』とされ、大日本仏教全書所収の、室町時代成立とされる『三論宗経論章疏目錄』のみ吉蔵書と同名で記している。しかも目録の記述より判断すると、吉蔵の遊意は、羅什訳の成仏経（下生経）に対するもので、慧均の遊意は、上下両経に対するものであることが考えられる。

C、そこで、現行本の内容を見ると、宗体を論じるところで、上生経と下生経を対比し、上生は大乗、下生は小乗と判じていることや、序文により、現行本は、上下両経に対する遊意であることが明らかとなつた。この判別は、吉蔵の『観無量寿経疏』とは見解を異にする。

D、また南北朝における教判説の紹介が、他の吉蔵の記述とは、かなり趣きを異にすること。

E、本書では、仏滅等の年代論を出し、十九出家三十成道八十滅度説を採用しているが、吉蔵は「観経疏」の中で、二十

九出家三十五成道を主張すること。また、この点につき、本書では、「大経遊意（疏）」に説明を譲るが、現存の吉蔵の『涅槃遊意』等には相当する記述がないこと。

F、用語、文体の面で、他の吉蔵書に見られぬ用例が、しばしば出てくること。たとえば、「具さに中仮を論ずるが故に」等や「地摂両論成毘二家の義宗」等。

G、さらに、安澄の『中論疏記』卷二末（大正六五、四六上）において、「今案、成仏経疏云」として引用しているが、この一文は、慈恩・元晁・憬興の疏には無く、現行の遊意にも見当たらないこと。しかし、引用の状況から判断すると、三論宗の疏であり、吉蔵の疏を指すものではないかと思われるが判然としない。もし、安澄の引用文が、吉蔵疏からのものとするれば、現行の遊意は、全く別ものということになる。一方、澄禅の『三論玄義檢幽集』卷五（大正七〇、四五七下）では、「恵均師弥勒経遊意云」と明記して、現行遊意の一文を引用している。

以上のようなことが指摘され、これらのことについて、慧均の『四論玄義』との比較検討をすると、内容上、用語文体上から、相応一致する点が見出されたのである。したがって、現行の遊意は、吉蔵のものではなくて、慧均の撰にかかっているものではないか、との仮説を立てたのである。しかし、残された問題点も存し、何よりも、目録記載の書が、具体的に

伝承され、流布し依用されていたという事実を明らかにする必要がある、また、その上で、現行本との異同が明確にされることが要求されていたわけである。

二、今回紹介する文献の書誌的状况は次のごとくである。

A、筆写年代等 南北朝（観応三年・一三五一）写、卷子本、訓点ナシ、異本校合アリ（墨）、縦二六・一センチ、全長一

三二六・九センチ、紙数三十三紙（押紙奥付含む）、一紙欠、

墨界、一紙二十三行、一行十七―二十四字。

B、外題 弥勒経遊意（本文と別筆）

内題 弥勒上下経遊意十重 均僧正撰

尾題 弥勒上下経遊意十重義一卷

卷末裏 弥勒上生経遊意卷第一（別筆）

C、識語・奥書等

（中間押紙）弥勒上下経遊意卷末欠脱別幸有_{セリ}卷末_ニ請_ム

合_テ兩本_ニ而備足焉

（奥書）観応三年八月二十三日於山城国綴喜郡田辺郷令書写

了 同翌日以東南院御経蔵御本令校合了 載_ル本者彼御本

也兩本共文字脱落惟多僻字又不知数重尋証本可校定畢

三論宗沙門憲朝

抑此書者嘉祥均正兩所之製作在之歟而即所持聖教中二所积
共次闕之仍平来雖有書写之志御経蔵本者虫□之損失散散也
其外依不尋得写本闕之了今適得一本令書写之処文字散散彼

御経蔵本虫□也此共願指南尤以無止矣

大略以上のごとくであつて、筆写の年代、底本の保存状況、写本系統等も奥書によつて知られる。この写本が、宝生院に所蔵されていたことは、戦前の黒板勝美博士の善本目録に記載されていることに依り、以前から知られていたことになるが、しかし、黒板博士の目録は、主に外題によつて作成してあるため、目録のみでは、誰のものか判然とせず、恐らく吉蔵の遊意であろうと推察される程度であつた。ところが、実際に調査した結果は、右のごとくであつて、均僧正撰として、慧均の撰号が明確に記載されていたわけで、内題に依つて、「東域目録」等の記載と一致することも明らかとなり、まぎれもなく慧均の遊意であることが判明したのである。そして、これを、現行本及び他の写本と比較するとき、大同小異、筆写上の誤字脱字、脱文が相互に見られるだけで、同一の内容であることが明らかとなつた。

三、そこで、宝生院写本の文献的価値であるが、筆写したのは、奥書から判断すると、南北朝時代の三論宗学者憲朝である。この人の伝記は不明であるが、宝生院には、憲朝の写本が数部伝えられており、その奥書より嘉暦四年（一二三九）から康安元年（一三六一）頃に、本書の奥にも記される現在の京都の綴喜郡田辺町と東大寺三面僧坊実相院において、連続して三論の文献を写したことが知られる。また彼の筆写した

宝生院蔵『弥勒上下経遊意十重』について（伊藤）

『大品経義疏』巻五の康安元年（一三六一）の奥書には、権大僧都憲朝とあつて、あるいは『三会定一記』第二の元弘二年（一二三三）に記載する東大寺研学を勤めた憲朝その人であるかも知れない。恐らく東大寺の三論学者であり、写本は信頼出来るものと思う。しかも、本書では、奥に言うごとく、東大院経蔵本との校合を厳密にしており、その点からも資料的価値は高い。さらに、現行本と比して、より原形態を留めていることも確かである。ただし、憲朝も言うごとく、本写本の底本及び東南院本共に、甚だ保存状態が悪かつたようで、穿つた見方をすれば、これは、吉蔵の撰述書ではないがために、軽視されて来たためではなかつたか、という推察も可能と思ふ。長い間三論の本拠であつた東南院の御経蔵本が、すでに散々の状況であつたとするならば。そして、他の現存写本のいずれにも撰号がない理由も、本書における東南院本との校合によつて推察されて来る。と言うのは、東南院本は、虫食が甚だしく、撰号記入の部分に、虫食のため不明との注記がなされているからである。そこで、他の写本中、一番年代が古いのは、現在東大寺図書館所蔵の写本であり、その表紙左下には宗性とあつて、宗性所持本ではなかつたかと推察されるのであるが、この写本にも撰名はなく、その頃から、すでに撰者名は明確でなくなつていたためではないか、と考えられるのである。そして、その後の高野山本以下は、すべて東

三三五

大寺本の転写本と考えられるので、一様に撰名が欠ける結果になつたと思われる。ただ、目録には吉蔵の遊意の存在を伝え、また安澄も引用しているごとくであつて、慧均のものと二本が流伝していたことは間違ひなからう。しかし、かなり古くから吉蔵本は散逸したのではあるまいか。それは、安澄の引用が、吉蔵疏からのものとすれば、管見ではそれが唯一の引用だからである。そして、時代が降るに従つて、本書が慧均のものか、吉蔵のものか判別がつかぬ状況となり、したがつて、撰号不記のままに伝えられるに至つたと考えられるのである。この点は、室町時代の三論録に見られる撰者名の混乱によつても窺われる。ただし、これは東大寺系の写本類、伝承であつて、「檢幽集」での引用や宝生院本の存在を考えると、東大寺系以外には、慧均の撰号を有する写本が伝えられていたと見られるのである。

四、本写本は、いわゆる東大寺三論宗の伝承とは異なる、別の系統に伝わつていたものが底本であつたと考えられる。勿論、本来は、東大寺に伝えられていたものを筆写したものであつたかも知れない。しかし、鎌倉から室町時代には、京都を中心とする三論研究も盛んであつて、南都から持ち運ばれた典籍類も多数存したに相違なく、醍醐寺や太秦の桂宮院には、すでに東大寺等には存在しない典籍も伝えられていた可能性がある。本書も、筆写の場所や、「檢幽集」での引用か

ら見て、京都の三論系、というより、むしろ真言系に伝承されていたものではなかつたか、と推察するわけである。

ともかくも、本写本の出現によつて、現在、大日本統蔵経及び大正蔵経の目録、仏書解説大辞典等で吉蔵撰とされているものが、実は、慧均のものであつた、ということが明白になるうかと思ふ。本写本の全体についてと現行本等との異同についての詳細は略さざるを得ないが、別の機会に発表したいと思ふ。また、本書が慧均の撰述書であるとするれば、従来、吉蔵撰として扱つて来たことに改めて検討を加える必要が生ずるであろうし、また、慧均の学風、思想を考へる上に、新たな視点を提供するものとして、注目されて良いと思われる。

（昭和五十一年八月稿）